

すぎのこ



「思いやり」を育てる

「非認知能力を育てる その二」

「いじめ
が放置
される
園・学
校」といえるかもしれません。

先日、経済アナリストの森永卓郎さんがお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

森永さんは亡くなる直前、ラジオの番組で「世の中が分断されて、ちよつとでも弱みを見せると袋だたきになる。もちろんやったことは悪いんですけど。世界中で分断が広まっている。楽しい世の中は、お互いの思いやりで生まれる。ちよつとでも弱みを見せたらおしまいという社会は、私は心苦しい。」「人の非難をしながら、自分もターゲットになるんじゃないかとおびえている。」とおっしゃいました。最期におっしゃったこの言葉の意味を最近ずっと考えています。

「分断される社会」、それを子どもたちの社会に置き換えてみれば、

校」といえるかもしれません。

文部科学省「いじめ防止対策協議会」(二〇一六年度)による調査では、九割の子どもが「小四

から中三まで六年間に一度はいじめをしたこと・されたことを経験した」と答えています。「いじめについては、『どの子どもにも、どの学校においても起こりうる』ものであることを十分認識する(文科省)」「必要があります。ですがそれをそのままにしてよいのか。それはいけません。いじめは子ども心に深く傷として残ります。人生全体に大きなマイナスの影響を受けることもあります。ですから、いじめはどの子どもにも起こり得るもののだとしても「放置される園・学校」ではなく、子どもたちの心を耕し回りの人を大切に

尚綱大学附属こども園

ようとすることで温かい園・学校を作っていくことが大切です。森永さんがおっしゃる「楽しい社会」は、一人一人の人権が尊重され少数の意見を大切にすることが原点だと思います。その原点がこども園にあると思っています。



「危ないから持ってあげるね」

園児は、こども園における日常生活で幼児同士の間に起こる様々なトラブルに遭遇します。例えばおもちゃの取り合いや順番争いなど、大小はさまざまですが様々ないざこざがあります。しかしそのいざこざがあるからこそ、その経験を通して人との付き合い方や集団生活のルールを学び取り、社会的スキルを身に付けていくのです。

ただし、外見적으로는同じように見える幼児間の摩擦の中には、発達に必要な経験として見守ってよいいざこざと、いじめられる幼児の心が傷付き、その後の発達に影響を及ぼしかねないいざこざとが混在しています。幼児期の友人関係の把握に当たって、いじめと判断できるいざこざについては、いじめる幼児に対して相手に与える苦痛に気付かせたり、人との適切な付き合い方などについて教えたりすることが大切だと思います。相手の気持ちを想像させながら謝りたい気持ちを持たせることもその一つです。

また、友達が困っている場面で、自分ができることを考えさせることも重要です。そのためには友達が困っていることに気づく力や思っているだけでなく相手を助ける行動力が必要になってきます。保育者も手本を見せながらほめたり励ましたりしながら導いていくようにしています。

森永さんはこうもおっしゃっています。「いま議論するべきは袋叩きではなく、どうしたら国民



「こうやって包めばいいよ」

が幸せになれるか。それが国会の務め。：根っこにかえて、みんな支え合おうよと私は思っています。」

その根っこにかえれば、そこに幼児教育があり、相手を思いやる心を育む教育・保育があります。

【お知らせとお願い】

①令和七年度の入園式について、検討した結果、四月二日(土)に実施いたします。

②二月の生活発表会が終わって学校(園)評価のアンケートをお配りしますので協力よろしく願います。

③今年度末の杉の子会総会は書面総会になりました。例年年度についての園からのお知らせをその場でさせていただいていましたが、今年度は生活発表会の折にご説明させていただく予定です。